

い収容生活も終わりとなった。無蓋貨車の引揚げ列車に乗り撫順駅を出発、奉天、錦州を通りコロ島に到着、ここから乗船となるので、荷物の検査、予防注射を受ける。六月十一日午前十一時引揚げ輸送船にて出帆。黄海を渡り、丸々三日間船に揺られ六月十四日佐世保へ入港した。しかし、船内に赤痢患者が出たため、上陸できず十三日間船内での生活が始まった。ここで疲労をいやし、検疫、予防注射を受け久しぶりに米のご飯と祝い酒を戴いたとき、ようやくみんなの顔も明るく生き生きとして来た。

六月三十日、佐世保駅より引揚げ列車に乗る。援護局の人々や町の人達の見送りを受け、一路故郷へ。七月三日午前七時三十分、懐かしの山形へ到着。母村の人々の出迎えの車に乗り、故郷入りをする。未帰還者二人、死亡者七十三人、引揚げ者百六十八人、それぞれ親戚の人達に引き取られ家路に着いた。

惨たる逃避行ひと月間

東京都 鈴木正一

熱河省の青龍県から、八月十九日昼、私ら四家族十三人は、子どもと荷を少し馬車に乗せ、平泉を目ざして急ぐ。数日來の雨で道は寸断されて遅々。部落に泊る。

翌朝、小雨の中を出発。濁流を渡るのだ。振り落とされまいと家族らは子どもをかばい、ゆるる馬車に必死でしがみつく。

びしょ濡れになって夜、大地警察署前に着いた。が、入れない。先発の婦女子一団が雨で足止めになって署に居るほか、日本軍の分遣隊も駐留しているので満員。李署長の指示で隣りの村公署建物に泊る。

ところが、翌朝八時ごろ突然けたたましく警察署のほうで銃声があった。私らにつき添ってきている協和会の使用人の邵連祥が「日本軍と警察隊が撃ちあいになった」と駆けこんできた。

反乱した警察隊の一部は、すでに村公署建物を包囲し、迫ってくる気配。即連祥は戸口に立ちほだかり、反乱隊に向かい何か説得しているもようだったが、撃たれた。頭から血を吹きだして倒れた。まじかの危険に一同は死を覚悟した。日本刀を持つ北村光一に対し「私から先に」と、夫人は二児を抱き正座して合掌する。私は、それを制止した。

侵入した者が略奪を始める。その時、駆けこんできた李署長は「日本軍の発砲を中止するように」と興奮して叫ぶのだ。

私ら数人は李署長にしたがいとび出す。日本兵や満系署員の死傷者数人をのり越えるように進み、私らは日本軍に、李署長は反乱部隊に向かい「射撃止め」を呼びかける。

日本側の隊長は戦死していて、上官を失った兵たちは「お願いします」と寄ってきた。

他の棟に閉じこもり、ふるえていた婦女子を連れ出す。不幸にも栗原夫人は便所に行つて流れ弾にあたり死んでいた。新婚で、子はない。

望楼の日系警察官も降りてきて、総数八十人ちかい。署長は武器などの放棄を命令した。すなおに、全員手を揚げた。署長はさらに「日本は敗戦、満州国は破壊した。いま婦女子をまじえて戦闘することは無意味だ。全員すぐ退去するよう」との意味のことを述べた。

出発を決行。哀しいけれど、栗原夫人の死体はおき取りだ。

ほとんど着のみ着のまま赤ん坊を背に、あるいは子の手を引く集団に暴民が鎌や棒を持って迫りくる。途中、全員手をとり合つて腰までつかる川を必死で渡る。のに婦女子を目がけて略奪が始まる。犠牲者は出なかったが、子らはおびえて泣き出す、みんな恐怖に包まれ、黙々として歩き続ける。

三日後のこと、安達石協和会の楊分会長の援助で休んでいたところへ後続の青龍邦人と日本軍の依田大隊が合流してきた。心強く、その部隊警護のもとに錦州を目ざした。

通算一か月ぐらい歩き続ける。乞食姿で錦州の女学校に収容されたのは九月二十日。もう街路樹はきばんでき

たのだ。途中の風物など全然目に残っていない。
私らのために命を失くした邵連祥の霊よ安かれ。

坂下分村放浪記

岐阜県 桶 ぶ さ

十一日の夜、本部に集まって、ソ連が押し寄せてくるの情報に、墳墓の地と定めた七星で全員自決するか、それとも逃げのびるか、の二論に大方は自決のほうに賛成でした。団長吉村さんが死ぬのはそれからのことで、まず落ち延びるの意見にしたがって一族一台の馬車に、必要な品を積んで七星分村を後にしました。七星を出て、その日にソ連軍の戦車に逢いました。そのときのおそろしさは生涯忘れません。畑に身をかくし、目の前の道にたくさんの戦車がびたっととまって銃を向けて、なにやらわからぬ言葉でわめくありさまは生きた心地なんではありません。いかに広い畑とはいえ、五百人、しかも幼い子どもの多い集団です。一発の発砲もせず、反対の

道を通りすぎていきました。運命の別れ道とはこのことです。原さんの奥様が泣きわめくみどり子を五百人の命ととりかえて北満の包米畑に残してきたのです。

終戦も知らされぬまま、昼間は野山に伏し、夜は暗やみにまぎれてどこへ向っているかも知らずの行軍。なんといっても着のまののままの五百人の大世帯、空腹で歩けないありさま。どこかおぼえておりませんが、堀田のおじいさんは石の上にすわりこんで、わしはもうここより絶対に動かんで、みんな先に行ってくれ、とがんとしときき入れず、山中に一人残してきました。食べる物なんかありません。背に腹はかえられず、愛犬まで食べました。夜になると、満人の畑でとうもろこし、じゃがいもをぬすみに行きました。いくらおとなしい満人でも、たいせつに育てた作物を一夜に荒らされたらだまっています。満人の銃撃にも逢い、九死に一生を得て逃げのびましたが、ここでも犠牲者を出しました。若い男は兵隊にとられ、残りは老人と女子どもの大世帯です。子どもを二人背負い、両方に子どもの手を引いてあわれな行軍をした方がいく組もありました。飢えと寒さと疲労の